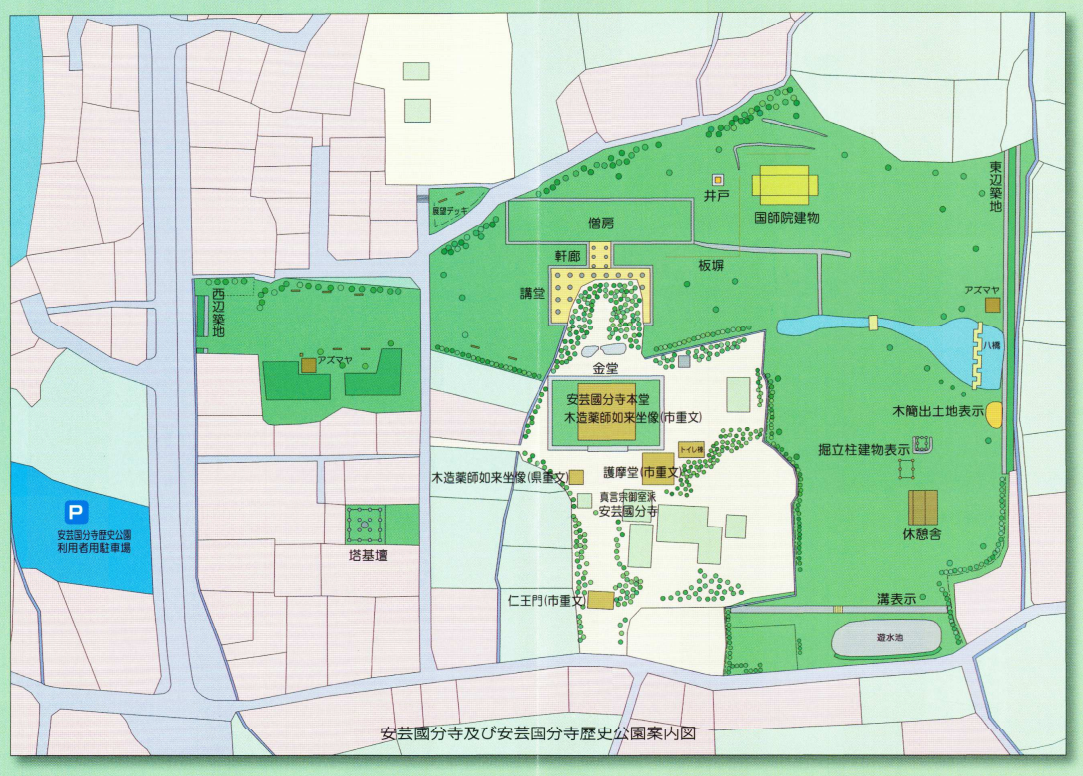
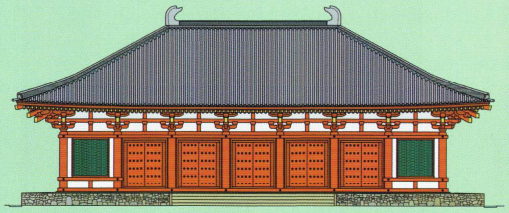


安芸國分寺及び安芸国分寺歴史公園案内図

金堂

金堂は、本尊仏を安置した建物で、国分寺で最も重要な堂宇の１つです。

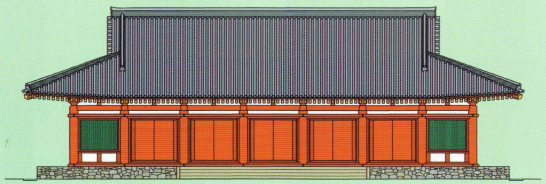
基壇は、早い時期に削られたようで、ほとんど残っていませんでしたが、発掘調査により、雨落ちと考えられる溝や、建築用の作業用の足場を組んだ時の穴などが検出され東西約 33 m、南北約 22 mの基壇であったことが推定されました。この基壇上に、正面７間、奥行４間の寄棟造本瓦葺の建物が建っていたようです。


金堂想像図

講堂

講堂は、僧侶が集まり経典や法会（法要）の作法を学ぶ建物です。

基壇外装は自然石積で、基壇内では数か所で礎石が確認されています。基壇の規模は東西約 31 m、南北 17 mで、その周りには雨落溝がめぐっていました。基壇上には、正面７間、奥行４間の入母屋造本瓦葺の建物が建っていたようです。


講堂想像図

僧房想像図

僧房

僧侶が寝起きした寄宿舎に当たる建物です。東西 55 m、南北 13 mの長細い基壇上に、屋内が細かく区切られた切妻造板葺の建物が建てられていました。講堂から僧房へは、幅約６m長さ約８mの軒廊と呼ばれる屋根付きの渡り廊下でつながっていました。

講堂跡・軒廊跡調査状況（北から）

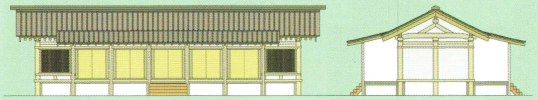
国分寺塔跡

国師院建物跡（南から）

国師院建物

国師は奈良時代に都から各国に派遣された僧官で、各国の僧侶の指導・育成や法会（法要）の執行をしていました。文献では早くからその存在が知られていましたが、発掘調査で、「国師」「国師院」「国院」などの墨書土器が出土し、国分寺の寺域内に国師の事務所（国師院）が置かれていた事が明らかになったのは、安芸国分寺が初めてです。

国師は、平安時代になると「講師」と呼び方が変わりますが、安芸国分寺では、国師院の北東 40 mのところで「講院」などの墨書きのある土器とともに平安期の建物跡を検出していて、「講師院」と推定されています。


国師院建物想像図

塔

聖武天皇の玉歯が埋められているという伝承があった塚を、昭和７年に発掘調査したところ、心礎をはじめとした塔の礎石が発見され、ここに国分寺があったことが明らかとなりました。

参考：豊後国分寺七重塔復元模型

塔の基壇は約 16 m四方、高さ約１mで、一部で版築が確認されています。基壇上の約９m四方の範囲に礎石が並んでいます。国分寺では七重の塔を建てることが決められていましたが、地方によっては五重塔であったりしてまちまちだったようです。安芸国分寺の場合は、礎石規模からみると七重塔を建てるにはやや小さめな規模ですが、工学的には建築は可能な大きさです。

塔は、平安時代末期頃に火災に遭い、西側に倒壊していて、大量の瓦が地中に埋まっています。火災の後、塔は再建されず、土砂で埋められ、高さ３mほどの塚となっていました。塔跡では多数の瓦が使われ、破損のたびに差し替えも行われていたため、年代の異なる瓦が同時期に屋根にのっていたようです。

国分寺塔跡出土瓦